

## T 大学における入学形態と学生の英語力の関係

## The Relationship Between the Types of University Entrance Examinations and Japanese Students' English Proficiency in T University

目 時 光 紀<sup>1)</sup>

Mitsutada METOKI

本稿では、T 大学看護栄養学部<sup>1)</sup>に在籍する学生の入学形態と英語力の関係について報告する。T 大学の入学者選抜方法は、指定校推薦入試、公募制推薦入試、社会人入試、一般入試、センター試験利用入試の 5 つである。このうち、英語科目の受験が求められるのは、一般入試とセンター試験利用入試のみである。本研究では、2012 年度入学の 1 年生に G-TELP Level 4 (300 点満点) を実施し、英語科目受験群 (一般入試入学者、センター試験利用入試入学者) と英語科目非受験群 (指定校推薦入試入学者、公募制推薦入試入学者、社会人入試入学者) のスコアの平均値に統計的な有意差があるかどうかを調査した。調査の結果、英語科目受験群のほうが英語科目非受験群よりも平均点が約 34 点高く、統計的な有意差も見られた。

This paper discusses the relationship between the types of entrance examinations and Japanese students' English proficiency in T University. There are five entrance examinations for T University: examination and entrance by recommendation from specific schools; examination and entrance by recommendation from any schools; examination and entrance for working people; examination and entrance by the school; examination and entrance by using scores from the National Center Test for University Admissions. The examination and entrance by the school and the examination and entrance by using scores from the National Center Test for University Admissions require examinees to take an English test while others do not. In this study, G-TELP (Level 4) was given to first-year students who entered T University in 2012. The students were divided into a non-English test group and an English test group depending on whether they needed to take the English test to enter the university. Mean scores of both groups' G-TELP (Level 4) results were calculated and analyzed by t-test. Findings show the mean score of the English test group was about 34 points higher than that of the non-English test group and statistically there was a significant difference between the mean scores.

キーワード：英語教育 (English Education)

大学入試 (University Entrance Examinations)

入学形態 (Types of Entrance Examination)

英語力 (English Proficiency)

日本人大学生 (Japanese College Students)

1) 天使大学 看護栄養学部 教養教育科

(2014 年 1 月 8 日受稿、2014 年 3 月 28 日審査終了受理)

## はじめに

18 歳人口が減り続ける中、4 年生大学の数は増え続けている。進学率も 50% を超え、大学を選ばなければ誰でも大学に入学することができるようになった。このような状況の中、多くの大学が学生確保のため、入学者の選抜方法を多様化させている。これにより学生の間で学力格差が広がり、授業が成立しないなどの問題が発生していると佐藤（2010）は指摘している<sup>1)</sup>。

一方、英語力の格差も広がっている。小野（2006）は、国立大学と私立大学で実施された英語プレイスメントテストのスコアを比較した結果、二極分化の傾向があったと報告している<sup>2)</sup>。

英語力の格差の広がりには、習熟度別授業の導入に拍車をかけている。大学英語教育学会実態調査委員会（2002）が 2000 年に実施した調査（回答数 360 校）によると、34.4% の大学で習熟度別授業が行われていた<sup>3)</sup>。また、杉森（2003）が 2002 年に実施した調査（回答数 208 件）でも、63% の大学（短期大学を含む）が習熟度別授業を行っていたことが判明した<sup>4)</sup>。これは、両調査の回答数は異なるものの、習熟度別授業を導入した大学が数年で大幅に増えたことを意味している。

習熟度別授業を導入する大学が増えている背景には、英語力の差が学生の間で広がっていることがある。小野（2006）は、その原因として入試の多様化を挙げている<sup>2)</sup>。大学にも拠るが、現在、指定校推薦入試、公募制推薦入試、AO 入試、社会人入試、一般入試、センター試験利用入試など、様々な方法で入学者が選抜されている。そのため、英語科目を受験することなく大学に入学してくる学生が増えてきている。そのことが学生間の英語力格差を引き起こしていることは否定できない。早瀬（2006）も「推薦制度の増加、試験科目選択の柔軟化、AO 入試の導入など、近年、入試制度が多様化し、英語を十分学習しないままに、入学してくる学生が増えている。・・・(中略)・・・英語の入学試験を受けないで入学する学生の英語

力は、一般的に低く、必修科目である英語の単位習得が問題となっている」（p. 69）と述べている<sup>5)</sup>。

一方、入学形態がどのように学生の英語力に影響しているのかについて実証的に書かれた論文はほとんどない。よって、本研究では、入試で英語科目を受験した学生と受験しなかった学生の英語力の差について実証的に調査した。

本論は、以下 5 つの部分から成る。Ⅰ. 先行研究 Ⅱ. 研究課題 Ⅲ. 研究方法 Ⅳ. 結果 Ⅴ. 考察 Ⅵ. 結論

## Ⅰ. 先行研究

前章でも指摘した通り、入学形態と大学生の英語力の関係について実証的に書かれた論文はほとんどない。一部の大学では調査がされているものと思われるが、入学形態は個人情報に関する事項であり、論文の中で詳細を開示することは非常に難しい。また、そのことが先行研究を少なくしているとも言える。

もちろん、数は少ないが発表された論文もある。浅野（2008）は O 大学の 1 年生を対象に調査を行った。2004 年度、2005 年度、2006 年度の年度末に TOEIC Bridge IP テストを実施し、入学形態別・所属学科別・男女別に平均点を算出したのち、多変量分散分析を行った。結果は、入学年度や学科によって一部異なるものの、入試で英語科目を受験した学生のほうが受験しなかった学生よりも概して平均点は高く、統計的な有意差も見られた<sup>6)</sup>。

このことから、入試で英語科目を受験した学生と受験しなかった学生では英語力に差があり、英語科目を受験した学生のほうが受験しなかった学生よりも英語力が高いことが判明した。しかしながら、この研究には大きな問題点も存在している。その 1 つが、1 年次の終了時に英語力判定テストを実施している点である。入学後の英語学習がテストスコアに影響を与えた可能性は否定できず、

浅野の研究では入学形態と英語力の関係を純粋に見ることはできない。

したがって、本研究では、前期の授業が始まる前に英語力判定テストを実施したうえで筆者が勤務する T 大学における入学形態と大学生の英語力の関係を実証的に調査した。

## II. 研究課題

前章で述べたとおり、入学形態と大学生の英語力の関係について書かれた論文はほとんどなく、また入学した時点における英語力と入学形態の関係について論じた先行研究も見当たらない。加えて、入試で英語科目を受験したグループにおける英語力の差や受験しなかったグループにおける英語力の差について書かれた論文も全くと言っていいほど存在しない。したがって、本研究での研究課題は以下の通りとした。

- 1) 入試で英語科目を受験した学生と受験しなかった学生の英語力に統計的な有意差は存在するのか。
- 2) 入試で英語科目を受験した学生の間には、どの程度英語力の差があるのか。
- 3) 入試で英語科目を受験しなかった学生の間には、どの程度英語力の差があるのか。

## III. 研究方法

### 1. 調査対象

T 大学では、2004 年度より G-TELP Level 4 を用いてプレイスメントテストを実施し、習熟度別に授業を行っている。2012 年度のプレイスメントテストは、2012 年 4 月 4 日（水）に実施された。

G-TELP Level 4 は、文法（20 問 20 分、

100 点満点）、リスニング（20 問 15 分、100 点満点）、リーディング・ボキャブラリー（20 問 30 分、100 点満点）で構成される英語運用能力判定試験（合計 300 点満点）であり、英検 3 級程度の難易度と言われている。2012 年度は、193 名（看護学科 1 年生 93 名、栄養学科 1 年生 95 名、栄養学科編入 3 年生 5 名）が受験した。

プレイスメントテスト実施後、栄養学科編入 3 年生を除く 188 名に今回の研究に関する研究参加説明書および同意書が配布され、177 名（看護学科 1 年生 86 名、栄養学科 1 年生 91 名）から同意書を回収した。したがって、今回の研究対象者は T 大学に 2012 年度入学した 1 年生 177 名（看護学科 1 年生 86 名、栄養学科 1 年生 91 名）である。

### 2. 調査方法

2012 年度の入学者選抜方法と入学定員および研究参加者を表 1 に示した。入試委員会から許可を得て、本研究参加者の入学形態に関する資料を入手し、一般入試とセンター試験利用入試で入学した学生を英語科目受験群、推薦入試（指定校推薦・公募制推薦）と社会人入試で入学した学生を英語科目非受験群とした。英語科目受験群は 96 名（看護学科 46 名、栄養学科 50 名）、英語科目非受験群は 81 名（看護学科 40 名、栄養学科 41 名）であった。そして、英語科目受験群と英語非受験群の双方でプレイスメントテストの平均値と標準偏差を計算し（表 2）、等分散性を確認するために Levene 検定（表 3）を行った。その後、独立したサンプルの t 検定（有意水準 5%）を行い、両群の平均値に統計的な有意差があるかどうかを調査した。

表 1. 2012 年度入学者選抜方法と入学定員および研究参加者

入学形態	英語科目 受験の有無	看護学科 募集定員	栄養学科 募集定員	看護学科 研究参加者	栄養学科 研究参加者
推薦入試 ・指定校推薦 ・公募制推薦	×	40	42	35	41
社会人入試	×	若干名	若干名	5	0
一般入試	○	37	33	38	36
センター試験 利用入試	○	10	10	8	14
合計数	N/A	87	85	86	91

注 1) 上記の表では、編入 3 年生募集定員 (5 名) は含まれていない。

注 2) ×は英語科目を受験する必要がないことを示し、○は英語科目を受験する必要があることを示す。

注 3) 看護学科一般融資募集定員 (37 名) と栄養学科一般入試募集定員 (33 名) は、社会人入試募集定員の若干名を含む。

#### IV. 結果

表 2. 平均値と標準偏差

入学形態	N	平均値	標準偏差	平均値の 標準誤差
英語科目非受験群	81	174.382	41.701	4.633
英語科目受験群	96	208.281	29.698	3.031

注 1) プレイメントテスト (G-TELP Level 4) は 300 点満点である。

表 2 は、英語科目受験群と英語科目非受験群のプレイメントテストでの平均値および標準偏差を示している。平均値の差は、33.899 点であった。

表 3 は、Levene 検定の結果を示している。p = .001 となっており、有意であった (p < .05)。したがって、等分散を仮定することはできない。

表 3. Levene 検定の結果

	F 値	有意確率
等分散を仮定する	10.930	.001*
等分散を仮定しない		

\* p < .05

表4. t 検定の結果

	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の 差	差の 標準誤差	差の 95%信頼区間	
						下限	上限
等分散を 仮定する	6.295	175	.000*	33.899	5.384	23.271	44.525
等分散を 仮定しない	6.122	141.327	.000*	33.899	5.536	22.952	44.844

\* p < .05

表4は、t 検定の結果を示している。Levene 検定の結果、等分散を仮定することができないことが判明したため、「等分散を仮定しない」と書かれた箇所の数値を読んでいくこととなる。p=.000 となっており、2つの平均値には有意差があると言える (p < .05)。

次に、英語科目受験群と英語科目非受験群のスコア分布を検証した。表5は英語科目受験群と英語科目非受験群の基本統計量を示している。また、図1および図2は調査対象者のスコアの度数分布を示している。

表5. 基本統計量

	英語科目非受験群	英語科目受験群
平均 (300 点満点)	174.382	208.281
標準誤差	4.633	3.031
中央値	175	215
最頻値	130	230
標準偏差	41.701	29.698
分散	1738.989	882.014
尖度	-0.787	-0.746
歪度	-0.038	-0.480
範囲	170	120
最小	90	140
最大	260	260
合計	14125	19995
標本数	81	96

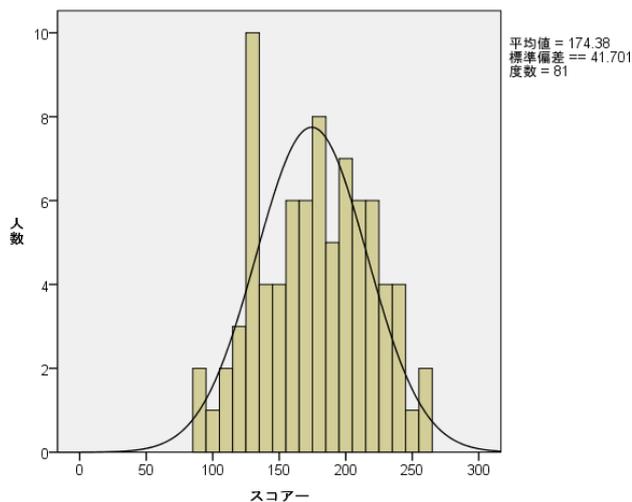


図 1. スコアの度数分布（英語科目非受験群）

注 1) 階級間隔は 5 点となっている。

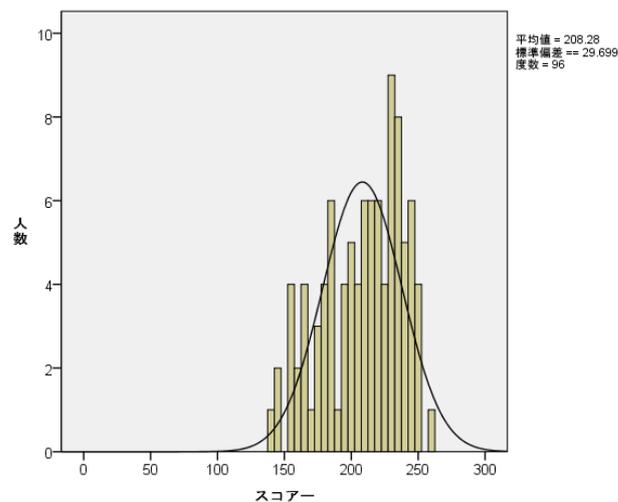


図 2. スコアの度数分布（英語科目受験群）

注 1) 階級間隔は 5 点となっている。

英語科目非受験群では、スコアの最小値が 90、最大値が 260、標準偏差が 41.701 となっており、幅広い英語力の層が確認できる。これは、英語科目受験群（最小値 140、最大値 260、標準偏差 29.698）でも同じことが言えるが、英語科目非受験群の範囲は英語科目受験群に比べて広く、標準偏差も大きかった（表 5）。

歪度に関しても、両群ともマイナス値である。ただ、英語科目非受験群は -0.038、英語科目受験群は -0.480 となっており、英語科目受験群のほうがより右側に傾いたスコア分布となっている。これは、英語科目受験群のほうが英語科目非受験群よりも群内における高得点者がより多いことを意味している。このことは、英語科目非受験群の最頻値が 130 となっている一方、英語科目受験群の最頻値が 230 となっていることから推測できる（表 5）。

## V. 考察

上記の結果を踏まえ、設定された 3 つの研究課題について考察を加える。

- 1) 入試で英語科目を受験した学生と受験しなかった学生の英語力には統計的な有意差は存在するのかが。

平均値の差は 33.899 点（表 4）であり、統計的な有意差も確認された。しかしながら、英語科目非受験群の学生全員が英語科目受験群の学生よりもスコアが低かったわけではない。実際、英語科目非受験群と英語科目受験群の最高得点は、ともに 260 点となっている（表 5）。ただ、英語科目受験群のほうが概して英語力が高いことは両群の平均値の差が 33.899 点あったことから判明したと言える（表 4）。

英語科目非受験群の学生は、推薦入学者（指定校推薦・公募制推薦）と社会人入学者である。社会人入学者を除き、推薦入学者（指定校推薦・公募制推薦）は出願時に 5 段階の評定平均が 3.8 以上あることが求められる。もちろん、このことは英語科目の評定が 3.8 以上あることを必ずしも意味していない。入学者の中には英語科目の評定が 3.8 未満の者も存在する可能性はある。今回の研究では、高校在学時の成績まで調査しておらず、推薦入学者の高校在学時の英語科目の成績と大学入学時の英語力の関係については、今後の調査課題となるだろう。ただ、推薦入学者の英語力が高校 3 年間で定着していないのでは、という疑念は払しょくできない。また、推薦合格が決まる 11 月から翌年 3 月までの 5 か月間で英語力が急激に落ちるといった可能性も考えられる。

**2) 入試で英語科目を受験した学生の間には、どの程度英語力の差があるのか。**

英語科目非受験群に比べ格差は小さいものの、スコアの最小値が140、最大値が260となっており、英語力にはそれなりの差があることが判明した(表5)。ただし、英語科目非受験群に比べると、平均値が33.899点高く(表2)、スコアの度数分布も右側に傾いており(表5、図1および図2)、英語力が高いと言える学生が多いことが判明した。

T大学の一般入試では、英語科目にリスニングは含まれない。一方、本調査で利用したG-TELP Level 4にはリスニングセクションが含まれている。英語科目受験群(96名)には、リスニングが要求されるセンター試験利用入試で入学した学生も22名含まれている一方、74名の学生がリスニングを受験せずに本学に入学している(表1)。今回の調査では、G-TELP Level 4の各セクション(文法、リスニング、リーディング・ボキャブラリー)のスコア比較は行っていないが、英語科目受験群のスコア分布にリスニングセクションが及ぼした影響については、別途調査する必要があるだろう。

**3) 入試で英語科目を受験しなかった学生の間には、どの程度英語力の差があるのか。**

スコアの最小値が90、最大値が260となっており、英語科目受験群に比べると英語力の差は大きかった(表5)。ただ、スコアの最大値は英語科目受験群と同様に260となっており、英語力が高い学生も存在している。一方、スコアが満点(300点)の5割である150点を下回る学生が英語科目受験群では3名しか存在しないのに対し、英語科目非受験群では22名もおり、英語力が概して低い学生も多く存在している(図1および図2)。

**VI. 結論**

本研究では、T大学における入学形態と大学生の英語力の関係について調査した。結果として、

英語科目受験群と英語科目非受験群の間には英語力の差が存在した。一方、英語科目受験群にも英語科目非受験群にも、それぞれ英語力の格差は存在し、特に英語科目非受験群の格差は大きいことが判明した。

英語科目非受験群の英語力が英語科目受験群よりも低かった原因は、筆記試験の受験回避による学力の未定着や早期の合格決定による学力の低下など、いくつか考えられるが、さらに調査が必要である。

また、今回の調査を通して、英語科目非受験群には英語科目受験群に比べ英語力が低い学生が多いことも判明した。このような学生に対してどのような指導が求められるのかは大学としての課題でもある。

本調査では、G-TELP Level 4を用いて英語力を測定したが、英語力全般を比較したいという思いから、スコア比較には合計点のみを使用した。各セクション(文法、リスニング、リーディング・ボキャブラリー)のスコア比較を行うことも今後は考えなければならない。

18歳人口は今後も減少していくと言われている。学生確保の観点から、今後も多様化した入試は続くものと思われる。大学入学者間の英語力の格差もさらに広がり続けることが予想される。そのような状況の中、どのように英語教育を進めていくべきかは英語教育に携わる教員一人一人の課題であると言える。

**引用文献**

- 1) 佐藤美津子：「大学入試の多様化と学力格差」『多摩大学グローバルスタディーズ学部』3, 81-92, 2010.
- 2) 小野博：「基礎英語力低下の現状と改善策＜上＞中・高・大学生の英語力はなぜ下がったか」『英語教育』54(11), 63-67, 2006.
- 3) 大学英語教育学会実態調査委員会：『わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究

－大学の学部・学科編－』大学英語教育学会,  
2002.

- 4) 杉森幹彦:「英語統一テスト・習熟度別クラス  
編成・到達目標の設定および測定に関する実  
態調査の報告」『政策科学』10 (3), 3-26,  
2003.
- 5) 早瀬博範:「始まる、佐賀大学英語教育の改革」  
『大学教育年報』2, 67-76, 2006.
- 6) 浅野幸子:「入試形態による英語コミュニケー  
ション能力の格差」『大阪体育大学紀要』39,  
121-135, 2008.

### 参考文献

志手和行:「学力再考－学生の英語力の現状と関連  
させての－考察－」『国際経営論集』34, 109-118,  
2007.